

特220

264

昭和十六年三月

厚生省優生結婚相談所編

結婚と迷信

國民優生聯盟

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特 220
264

結婚十訓

- 一、一生の伴侶として信頼出来る人を選べ
- 二、心身共に健康な人を選べ
- 三、お互に健康證明書を交換せよ
- 四、悪い遺傳の無い人を選べ
- 五、近親結婚は成るべく避けよ
- 六、なるべく早く結婚せよ
- 七、迷信や因襲に捉はれるな
- 八、父母長上の意見を尊重せよ
- 九、式は質素に届は當日
- 一〇、生めよ育てよ國の爲

結婚と迷信

迷信とは理屈に合はない事を信ずることである。大昔の人間の知識は大部分迷信的のものであつたのが、人智の發達するに従つて次第に合理化されてきたのである。たとへば雷は雷神の荒れ廻るためではなく空中電氣によつて起ることがわかり、太陽が地球を廻るのではなく地球が太陽を廻ることがわかつてきたやうなものである。人間社會の文明といふことは、つまり古代の迷信を驅逐して合理的の知識を完成して行くことに外ならぬのである。

それにも拘らず、今日の世の中に、なほ數々の迷信が跋扈して人心を惑はし、少なからざる害毒を流してゐることは、まことに遺憾千萬な事といはねばならぬ。結婚といふ、事から見ても、これらの迷信のために、どれだけ大きな妨害を蒙つてゐることであらう。今日、人的資源の需要の上から結婚の促進を急務とする時代において、何としても捨置き難い重大問題であることは言ふまでもない。

今日行はれてゐる結婚に關する迷信の主なるものは、五行説とか十干とか十二支とか九星とかいつたやうなものであつて、その根元はみな支那から渡つてきたものであり、日本の古代にはなかつたものである。支那の舊式思想を打破して、新しい文化によつて東亞の再建を志してゐる日本民族が、支那流の最舊式の迷信によつて悩まされてゐるといふことは、何としても矛盾極まつた話である。

日本國民は今や新體制の機運に乗つて、國民自覺の上に一大轉回を遂げんとしつゝある。國民は、この機會において、一切の迷信的なる舊弊を脱却して、合理的なる新生活を建設する覺悟がなくてはならぬ。

五行といふのは、木火土金水のことで、支那では古くからそれを自然界の要素と考へ、天地一切のものがこの五氣の消長によつて左右されるものと信じてゐたが、それを更に當時發見された五つの惑星に木星、火星、土星、金星、水星と命名し、天に五星あり地に五行ありとして、この星の動きによつて人間に世相運命の變遷を示現するものと考へるやうになつたのである。

次にはこの五行の相互の關係について相生、相勝といふことを考へつゝいた。相生の順序は木火土金水で、木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ずといふのである。相勝の順序は水火金木土で、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つといふのであつたが、勝つといふことから相手と抗争する意味となつて、相勝は相剋と改められ、それを人の合性にも應用して、木性の人と火性の人とは相生であるから仲がよく、水性の人と火性の人とは相剋であるから仲がわるく、たとへば水性の妻と火性の夫とは、水剋火でいつも夫は妻に苦しめられるといふ風に考へるやうになつたのである。

一たい自然界の要素を木火土金水と決めたことからして、今日の知識から見れば幼稚なものである。地球は大ざつばに見れば土と水と空氣とから成立つてゐるのであるが、五行にはまづその空氣が忘れられてゐる。それから土と金とは今日の科學では續きものであつて區別するほどのことはない。また生物を入れるならば、地球の上には禽獸蟲魚草木といふやうに、あらゆる動植物が繁殖してゐるのに、木だけを取上げてゐるのも、おかしな話である。それから火は物質ではなく、物質の間に起る現象であるが、それを加へるほどならば、もつと風雨雷電なども加へて然るべきである。現に佛教では地水

火風空を五大と唱へて風と空とを加へてゐる。要するに木火土金水を自然界の要素とする考は、小兒が眼の前の物だけを見て、それを世界の全部だと考へてゐる程度のものに過ぎないのである。

次に木星、火星、土星、金星、水星の五つの星が天の惑星で、人間の運命を左右するやうに考へたのも、他の恒星がお互にその位置を變へないのに、これらの五星だけが不規則に運動することを不思議がつたためであるが、今日の天文學で、それが地球と同様に太陽の周圍を廻つてゐるものであることが判つてみれば、何の不思議もないことになる。その上惑星は五つだけだと思つてゐたものが、その後になつて天王星、海王星が發見され、最近になつてまた冥王星が發見されてゐる。さうなると五行は七行になり八行にならねばならぬわけで、この點からも五行説は根底から崩れてきてゐるのである。

相生相剋の理屈ほど變なものはない。相生の方で、木は火を生ずといふのは、木と木を摩擦して火が出ることから考へたかも知れぬが、燧石のやうに石と鐵とを打合はせても火が出るのであるから、土も金も火を生ずといつて差支ない筈である。火は土を生ずといふのは、物が燃えて灰が残ることから、土は金を生ずといふのは、土中から金を掘り出すことから考へつゝいたかも知れぬが、金は水を生ずに至つては、餘程困つてこじつけたものに相違ないのである。それから水は木を生ずといふのは、木が水分を吸収して成長することを考へたのかも知れぬが、それならば土は木を生ずとした方が遙かに適切ではあるまいか。要するに小兒だましのでたらめに過ぎないのである。

相剋の方で、水が火に勝つといふのは、水で火を消すことから、火が金に勝つといふのは、金が火に熔けることから、金が木に勝つといふのは、金が木よりも堅いことから考へつゝいたのであらうが、木が土に勝つたり、土が水に勝つたりするのは、何の事かさつぱり譯がわからない。牽強附會も爰に

至つては、むしろ噴飯に堪へないではないか。

今、日本では敵機の空襲に木造家屋の危険が叫ばれてゐる。それは火が木に勝つからである。それにも拘らず、五行説では火と木は相生で仲がよいといふのであるから、おかしなものである。

この五行説は、以下述べんとする多くの迷信の土臺となつてゐるのであるから、この誤つた觀念が崩れさへすれば、それらの迷信は成立たなくなるのである。

十 干 十 一 支

十干といふのは、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸のことで、これは初めは一ヶ月を三旬に分けて、その十日に名づけた名前であつて、今日の一週日に日月火水木金土と名づけてゐるやうなものに過ぎなかつたのであるが、それに前の五行を割當てて、甲乙を木の陽陰とし、丙丁を火の陽陰とし、戊己を土の陽陰とし、庚辛を金の陽陰とし、壬癸を水の陽陰とし、それが日本に渡つてからは陽陰を兄弟(エ、ト)と譯したので、キノエ、キノト、ヒノエ、ヒノト、ツチノエ、ツチノト、カノエ、カノト、ミヅノエ、ミヅノトと呼ぶやうになり、最初の意味を失つて、年にも月にも日にも當嵌めるやうになつたのである。

十二支といふのは、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥のことで、これも初めは一年十二ヶ月に名づけた名前であつて、それ以上の意味はなかつたのであるが、それに鼠牛虎兎龍蛇馬羊猿鶏犬猪といふ動物の名を當嵌めたのは、後代の事で、覺え易いために動物の繪を當嵌めたほどのものに過ぎなかつたのであつて、兩者の間に一つも共通な文字がないやうに子と鼠、丑と牛とは何の關係もないのである。それが後になつて「寅年に生れたものは虎に似た性質をもち、馬年に生れたものは馬に似た性質をもつ

と考へるやうになつたのである。俗曆に載せてゐる十二支の性質といふのを見ても、子年生れは細かい事に氣がつくが慾が深いとか、丑年生れは辛抱強いが變屈だとか、寅年生れは人の頭と敬はれるが高ぶり過ぎて剛情我慢だとか、申年生れは小才があつて意地が悪いとか、戌年生れは義理を守つて正直だとか、亥年生れは氣性が強く向ふ見ずであるとか、みなその動物の性質から割出して書かれてゐるのである。しかしそれは少しも事實に當つてゐないのである。誰でも自分を反省してみたり周囲の人を觀察してみれば、すぐ判ること、丑年に生れても敏捷な人もあり、申年に生れても落付いた人もある。それはその筈で、人の性質は遺傳によつて決まるのであつて、生れた年によつて支配されるわけではないのである。それにも拘らず世間では、何年生れと何年生れとは性が合ふとか合はぬとか、それを氣にして折角の良縁をぶちこはしてゐる例が少なくないのである。たとへば、仲の悪いことを犬と猿といふところから戌年と申年がいけないといつたり、巳寅申は互に仲が悪いといつたり、申年が三人寄ると三すくみになるとか三人のうち一人が死ぬとかいつたり、いろ／＼の説が言ひ傳へられてゐる。丙午の事は後に述べるが、それも馬の性質が荒いといふことに關係してゐる。また地方によつては寅年の女を氣が荒いといつて嫌ふ所もある。そのほか何でも考へ出し得るのである。それはその筈で、動物世界は喰ふか喰はれるかの修羅場であるから、どれとどれとを寄せてみても仲のよいものは有り得ないのである。従つて十二支を氣にすることになれば、年の違つたものは誰でも結婚出來ないことになる筈である。

人間は火の性でもなく水の性でもなく、また馬の性でも虎の性でもないのである。馬の子が子年に生れても酉年に生れても鼠や鶏の性質に少しも似ないやうに、人間は何年に生れても人間の性しか持つてゐないのである。

六十干支と納音五行

六

十干と十二支とを組合せて、甲子、乙丑といったやうに年に當嵌めて行くと、十と十二の差で段々づれて行くことになるが、六十年で一循環して元の甲子に戻ってくる。それが還暦で、數へ年六十一歳で年祝をやるのも、それから出たものである。それだけならば何でもないが、迷信製造家としては、この組合せにも何等かの意味を持たせたくなつてくる。そこで十干には前から五行が當嵌められてあるから、十二支にも五行を當嵌めてみたくなる。十二のものへ五を割り振るのであるから甘く行く筈がないのに、水土木火土金土水といふ順で無理やりに當嵌めてしまつた。さうして十干と十二支が相生するとか相剋するとかいつて、年や日の吉凶を判断したり、同氣が重なるると天地の氣が片寄るとか色々々の事を言ひ出した。後に述べる丙午の説もそれから出てゐるのである。

この六十干支が、謂ゆる陰陽家によつて、ます／＼もてあそばせられ、前漢の京房といふ男が音律の原理を應用したなどと勿體つけて作り上げたのが納音五行といふもので、今日の俗曆に納音表として載せられてゐるものがそれである。それによると、甲子の年は、性は金で、性の質は海中の金といふことになつてゐるが、もと／＼甲はキノエで木の性質であり、子には水が當嵌められてゐるのであるから、木と水とが集まつて金の性質に化けたといふわけであつて、何が何だか譯のわからぬものになつてゐるのである。その譯のわからぬものが、後に述べる九曜星に取入れられて、合性とか星廻りとかいはれて今日の結婚を支配してゐるのであるから、馬鹿々々しくても物も言へないことになる。

丙午の説

迷信が人間を悩ましてゐる例は澤山あるが、その中でも丙午（ヒノエウマ）の説ほど弊害の甚しい

ものはないであらう。最近では明治三十九年が丙午の歳に當つたのであるが、その年に生れた女性達の中には、それがために婚期が遅れたり、三十六歳の今日まで未婚のままに過してゐるものが、どれだけあることであらう。實に聖代の一大汚點であり、迷信鼓吹者の一大罪惡であるといつて差支ないのである。

丙午の説は、前に述べた六十干支の惡戯から出てゐるのであつて、丙はヒノエで火の陽であり、午も火に當るので火が重なりといふところから、初めは丙午の年には火難があるとして忌まれてゐたのであるが、それがいつの間にか人間に及んで、丙午生れは氣が荒いといはれ、男は女を殺し女は男を殺すとせられ、今では女にのみ限られるやうになつてゐるのである。

丙午生れの性質が荒いといふには、火が重なりといふばかりではなく、馬といふ動物が氣が荒くて人を蹴るといふ觀念が多分に結びついてゐるが、それは大きな認識不足である。十二支の中には虎だの蛇だのと恐しい肉食動物もあり、龍といふ不氣味な想像動物もあり、向見ずの劍呑な猪もある。馬は草食動物で、草の外は蟲けら一疋も食つたことはなく、人に馴れ人を載せ、荷物を運び田畑を耕し、十二支の中では一番有用な家畜なのである。殊に戦場においては、軍人と馬とは切つても切れぬ夫婦關係のやうなものである。軍馬が表彰されたり、軍馬の記念碑が建てられたり、愛馬行進曲が唄はれたりしてゐる世の中に、馬を猛獸のやうに考へることは、飛んでもない誤解であり、大きな矛盾である。

九曜星

九曜星の起りは、支那の大昔の禹の時代に洪水が續いた後、洛水から現はれた龜の背中にあつた斑

點の數から考へついたので勿體つけられてゐるが、實は何でもない數字の遊戲に過ぎないのである。一から九までの數を、二七六、九五、四三八と三行に並べてみると、縦に數へても横に數へても斜に數へても合計十五になる。それを非常に不思議がつて神聖なものと考へ、それに色々な細工を加へて、ます／＼複雑なものに作り上げたのが九曜星で、俗曆に載つてゐる八角時計の形をしたものがそれである。九曜星などと呼んでゐるが、全く人工物で天の星にはなんにも關係はないのである。この九曜星には第一に色の名前が當嵌められてゐる。一白、二黒、三碧、四綠、五黃、六白、七赤、八白、九紫といふのがそれである。七つの色を無理に九つの區劃に當嵌めたために、白が三回用ゐられてゐるのも滑稽である。

次に易の八卦が當嵌められてゐるが、周圍の八つの區劃を乾宮、兌宮、離宮、震宮、巽宮、坎宮、艮宮、坤宮と名づけ、真中が一つ足りないので、配當洩れのまま、中宮と名づけられてゐる。

またこの九曜星には東西南北の方位が與へられてゐるが、十二支はその東西南北に一つづつ、東北、東南、西南、西北に二つづつ配置して辻褄を合はしてゐる。

十干は東西南北の四方にちの／＼二つづつ、甲乙、丙丁、庚辛、壬癸と無理に押込んで、戊己は中央に隠されて紛失の形となつてゐる。

九つの區劃に五行を當嵌めるには餘程苦心したと見えて、一白、二黒などの順に水土木木土金金土火とめちやくちやに盛り込んでをり、それを勿體らしく一白水星、二黒土星などと稱へてゐるのである。

かうして作り上げた九曜星は、五黃が真中の中宮に居るべきであるが、どうした理由か、年々交代でぐる／＼循環することになり、或る年には一白が中宮に入るかと思ふと或る年には二黒が中宮に入

ることになるのであるが。その一白が中宮に居る年に生れた人は、一白水星が本命星となつて、その人の性質も運命も決まることになつてゐる。それからその一白が東の方に廻はつて行つた年には、一白水星の人は東方が本命殺で方角が悪く、その反対方向の西も的殺といつて、やはり方角が悪いことになり、その上五黃の居る方角は五黃殺、その反対は暗劍殺といつて萬人に凶の方角となつてゐるので、年によると東西南北、どつちを向いても手を足も出せないやうなことになる。

この九曜星は年の外にも適用されてゐるので、更に月によつて色々の運命が廻つてくることになる。俗曆に載つてゐる月々の運勢を見ると、その月々の悪い方角が示されてをり、結婚してならぬ月だの、縁談を始めてならぬ月だのと、さまざまの事が書いてある。

またこの九曜星によつて人の相性が決められてゐる。それは五行の相生相剋によつてたとへば一白の人には、六白と七赤が大吉で、四綠が中吉、三碧が吉、九紫が凶、二黒と五黃が大凶といつた風で、これだけでも結婚の凡そ半分が妨げられることになつてゐる。

年齢の迷信

相性の外に年齢の數による迷信がある。第一に厄年といふものがある。男の二十五歳と四十二歳、女の十九歳と三十三歳などが、その例であつて、大切な結婚に厄年は避けた方がよいといふことになる。面白い事には、それらの多くがみな數字の發音に因縁のあることである。十九は重苦、三十三は慘々、四十二は死にて、言葉の上で縁起をかつがれたものに相違ないのである。厄年の頃には男女共に生理的の變化から危険が多いためであらうと、迎合的の説をなす人もあるが、統計の上から見ても、それらの年に特に死亡率が増してゐるやうなことはないのであつて、全く何の根據もない迷信に過ぎ

ないのである。

二十二歳の女を嫌ふ説もある。その理由は二が重なるといふので、負擔が重くなるやうな意味に解されてゐるのであるが、これも言葉の洒落に過ぎないのである。その流儀で行くならば、二十は二重結婚の心配があり、二十一は二對一で三角關係、二十三は二重慘、二十四は二重死で双方死ぬかも知れないではないか、二十二歳といへば、結婚適齡の眞最中であるのに、それが一年間結婚に適せぬといふことになつたのでは、本人は勿論、國家の損失は莫大なものになるであらう。

四目十目と稱して男女の四つ違ひ十違ひを嫌ふ説もある。「夜目遠目傘のうち」といふのはいろはだどへにある文句で、夜見たり遠くで見たり傘のうちで見たりすれば顔が實物以上に美しく見えるといふ意味である。勘違ひも、そこまで行けば寧ろ愛嬌がある。

方角の吉凶

合性がよいとしても嫁を貰ふ方角が悪くては駄目である。方角の吉凶については、まづその年における歳徳神とその子である九人の神々の位置を知らなくてはならない。歳徳神は吉神で、この方角に結婚を申込み必ず成就することになつてゐるが、歳殺神や黄幡神の方角から嫁を取つてはならぬことになつてをり、大陰神も嫉妬深い女神として、この方角から嫁を取つたり、女中を傭つたり女に關する一切を慎まねばならぬ。また大將軍の居る方角は結婚がいけないのみならず、三年ふさがりと稱して、この方角を犯せば三年のうちに死ぬといふのであるから、恐ろしい話である。次に金神といふ荒神があつて、大金神と姫金神とが別々の方角に陣取つてゐるが、金神はこれを犯せば七人の命を取るといふのであるから、これもうっかり出來ない。

試みに昭和十六年の俗暦を開いてみると、大將軍と大陰神は卯の方、歳殺神は辰の方、黄幡神は丑の方、大金神は寅の方、姫金神は申の方に陣取つてゐるので、これらの凶神のみでも、十二方角の中で五つの方角を塞いでゐるわけである。

これらのうち、金神や大將軍には遊行日といふのがある。金神は四季の遊行日と稱して、春夏秋冬の〳〵五日間づゝ東西南北の四方へ遊行するの外、平素遊行日と稱して、甲寅、丙寅、壬寅、戊寅の日より五日間づゝ東西南北に遊行し、大將軍もまた春夏秋冬の〳〵五日間づゝ東西南北へ遊行するが、これらの方角を犯せば勿論その咎を受けることになつてゐる。

今一つ天一神といふのがある。十二神將の主將で、己酉の日に天上から下つて東北の隅に來り、東、東南、南、西南、西、西北（北の順序に、交互に六日、五日づつ滞在し合計四十四日のうち天に上り、天に居ること十六日にして己酉の日に再び地上に降ることになつてゐる。曆に天一天上とあるのは、その昇天の日を記してゐるのである。この神も頗る荒神で、その滞在する方角をふさがりといひ、向ひ犯すことを忌まれてゐる。

この外、九曜星による方角の吉凶がある。五黄が中宮に入つたときは何事もないが、五黄が他の八方に位置するときは、その方向を五黄殺といひ、その反対方向を暗劍殺といつて、共に凶の方位となつてをり、何事をも慎まねばならぬことになつてゐる。

以上は萬人に共通な方位の吉凶であるが、その上に九曜星の循環によつて個人々々についての方位の吉凶がある。たとへば昭和十六年の俗暦では、一白の人は子の方が本命殺、午の方が的殺で、共に宜しくないのみならず、丙丁壬癸、丑未、艮坤の方角がみないけないことになつてゐる。またその上に、月により日によつて悪い方角が附け加へられてくるのである。

結局、安心して縁談を申込んだり嫁を取つたり新婚旅行したりすることの出来る方角は、殆んど無いといつて差支ないのである。

日の吉凶

日の吉凶にはまづ六曜といふのがある。先勝、友引、先負、佛滅、大安、赤口といふのがそれである。先勝は先んずれば勝ち、先負は先んずれば負けるといふ意味であらうから、友人は共引で勝負なしの意味でなければならぬのに、今では友を引くと解して葬式を出すことを嫌ふやうになつてゐる。大安は大吉日として婚禮に喜ばれ、佛滅は大悪日として何にも手を出すなといふ風に解されてをり、赤口は意味は判らぬが祝ひ事にはいけないことになつてゐる。

次に十二直といふのがある。俗暦の中段にたつ、のぞくなどと書込んであるのがそれである、建(たつ)は新事業を始めるにはよいが、その他は凡ていけない、勿論結婚もいけない。除(のぞく)は舊を去つて新に就くのによいが、結婚はいけないといつたやうな類である。

この外、六十干支から出た日の吉凶がある。六十干支の最後の十二日の中には、壬子、甲寅、乙卯、丁巳、己未、庚申、癸亥の八日があつて、これらは何れも水水、木木といつたやうに五行の同氣が重なるので、八專と稱して、天地の氣が偏在するものとして悪日とされ、結婚も當然避けるべきことになつてゐる。八專は一年約六回計七十二日あるわけであるが、曆には八專の入りの日だけが記されてゐる。また甲申の日から十日間を十方暮といつて、天地の氣相剋するものとして、相談事や他人に頼む事は一切いけないことになつてゐる。これも一年六回で六十日あるわけである。その他、初伏、中伏、末伏の三伏の日も婚姻等すべてを慎むべきことになつてゐる。

今一つ不成就日といふのがあつて、一ヶ月に三つか四つの割合で曆の上に書込まれてゐる。不成就日は何事をやつても成就せぬ日だといふのであるから、この日に結婚を申込んででも無駄であることは、さふまでもなう。

要するに系統の違つた迷信が、むやみに重なり合つてゐるのであるから、一方がよければ一方が悪く、完全によい日はめつたにないことになつてゐるのである。試みに昭和十六年の俗暦を元旦から繰つてみても、

一日 己酉 先負 收(あさむ)

干支は相生で、收も格別悪くはないが、先負であるから縁談など進んで口は出せない。

二日 庚戌 佛滅 開(ひらく) 不成就日

干支は相生で、開も結婚によい日であるが、佛滅といふ大悪日である上に不成就日である。

三日 辛亥 大安 閉(とづ)

干支は相生で、大安は大吉日であるが、閉は萬事に凶といふのであるから、折角の大安に疵がついてゐる。

四日 壬子 赤口 建(たつ) 八專入り

干支は同氣で可も不可もないが、赤口は祝ひ事には不可で、建も結婚を忌む日であり、おまけにこの日から八專に入るので結婚にはいけないことになる。

五日 癸丑 先勝 除(のぞく) 八專間日

先勝はよいとして、十二支は相剋で悪く、除も結婚に悪いことになつてゐる。八專は間日であるからかまはないかも知れぬ。

六日 甲寅 友引 除(のぞく) 八專

干支は同氣で可不可なく、友引は葬式でないからよいとしても、除は結婚にわるく、八專も面白くない。

七日 乙卯 先負 満(みつ) 八專

干支は同氣で可も不可もないが、先負は面白からず、満は神佛祈願の外は不吉といふことであり、その上、八專の續きで、やつぱり有り難くない。結局、どこまで行つてもよい日は見つからないのである。

概 括

以上述べたるが如く、五行といひ、十干といひ、十二支といひ、納音五行といひ、九曜星といひ、六曜星といひ、十二直と云ひ、その根元に遡つてみれば、いづれも何の根據もない空想や妄想の上に組立てられたものであつて、今日の知識から見ても、到底信ずることの出來ないものであることは云ふまでもないのである。就中これらの迷信を一貫して、吉凶判断の土臺となつてゐる五行が相生相剋するといふ觀念と、十二支の動物の性質が人間に影響するといふ觀念と、この二つのものが如何に荒唐無稽のものであるかを知つたならば、凡ての迷信は總崩れにならねばならぬのである。

假りに一步を譲つて、これらの説に多少の理屈があると認めたとしても、さてその年その日が、なぜ甲子であり乙丑であらねばならぬかと考へてみると、それこそ雲をつかむやうなものである。それらの循環は、なにも天地開闢の年から始まつたのではなく、歴史の途中で人間が勝手に甲子だの乙丑だのと名づけただけのことであつて、その年がなぜ甲子でなくてはならぬか、乙丑でなくてはならぬもの間違ひである。

何よりも、これらの迷信の條項がそれ自身の間に到るところ矛盾衝突を演じてゐることに心付かねばならない。もしこれらの諸説が眞に價値あるものであるならば、十干十二支から見ても、納音五行から見ても、六曜星から見ても、九曜星から見ても完全に一致しなくてはならない。然るに十干では木の性に當つてゐるものが十二支では水の性であり納音五行では金の性になるといつたやうに、ちつとも符合してゐない。あれほど大問題を起してゐる丙午にしても、火が重なりといふのは六十干支におけることで、明治三十九年生れを納音表で繰つてみると、天河の水となつてゐるのである、天河の水ならば少々の火は消えてしまふのではあるまいか、日の吉凶にしても、一方がよければ一方が悪く、よいのか悪のかさつぱり判断のつかないことは、前に擧げた通りである。

一たい、或る年に生れた人の合性がどうの星廻りがどうのといふことは、その一年間に生れたものが悉く同一の性質をもち同一の運命を擔つてゐるものとの考の上に成立つてゐるのであるが、そんな事が今日の我々に信じ得られるであらうか。同じ年に生れても人さまざまの性質があり、人さまざまの運命に曝されてゐるのが人生の真相ではあるまいか、小學校の一年生は大部分同じ年生れであるが、それがみな同じものになるといふことが判つてゐるならば、なにも勉強させたり訓育したりする必要はないといふことになるではないか。

これほど支離滅裂な迷信を、本氣になつて信ずるやうな人の頭は、どうかしてゐるのではなからう

か。迷信と精神病者の妄想とは、非常に近いものであつて、激しい迷信家になると、その妄想と殆んど區別のつきかねるやうなものがある。何れにしても迷信は文化人にとつては大きな恥辱であること
を知らなくてはならない。

迷信を信ずる人に、たゞお止めなさいといつても、容易に止められるものではない。そんな人々に對しては、むしろ徹底的に全部の迷信を知つて、その全部を信ずるやうに勧めた方がよいかも知れない。世間一般の迷信家は、たゞ聞きかじりによつて、一二の信條のみを知つて、それを金科玉條と心得て守つてゐるのであつて、こんなにも澤山な條件があることは知らないものである。だから、迷信の全部を知つて、それを實行することになれば、到底守り盡せるものでないことが判つてくるのである。

人間は弱いものである。前途の不幸を恐れて幸福を希ふためには、溺るゝものが藁をもつかむやうに、理屈に合はぬと知りながら 迷信に捲込まれてゐるやうな人も少なくない。また、心から信じてはゐないまでも世間で悪いといふものを、わざ／＼犯す必要はあるまいといつたやうな氣持を抱いてゐる人もある。つまり、これらの恐怖心が、いつまでも迷信を支持してゐることになつてゐるのである。

迷信を打破するためには、勇氣を必要とする。正しいと信じた事には、萬難を排しても邁進せねばならぬ。それこそ新體制下における國民の義務であり、とりわけ國民の將來を双肩に擔へる青年諸君に課せられた一つの任務でなくてはならないのである。

昭和十六年三月十三日印刷

結婚と迷信

著者 厚生省優生結婚相談所

印刷者 西脇嘉清
東京市京橋區横町一丁目一番地

印刷所 株式會社一成社
東京市京橋區横町一丁目一番地

定價 5 錢

1,000部—30圓
100部—4圓
(郵稅共)

發行所 厚生省豫防局優生課内
國民優生聯盟



終